

富岡洋子作 「そして、春」

<前編>

(音楽)

(教室のガヤ)

吉田栄子

薫、結実、おはよう。

岸本薫

あ、栄子、おはよ。

岸本

結実おはよう。

栄子

ねえ、見て見てこれ。昨日買ったんだよ。

薫

ん？ 何それ？ あ、分かった。サイン帳？

栄子

ピンポーン！ かわいい柄でしょ？

薫

へへーん私だって持ってるよ。フェリックスのなんだから。ほら。

栄子

わあ。やるじゃん、薫。あれ、まだ俊哉は来てないの？

結実

ううん、もうとっく。クラスみんなのサイン集めてるよ、向こうで。ほら。

栄子

あれ、ほんとだ。なんだあいつ、いつも遅刻ギリギリのくせして。私も行ってこ。あこがれの和田君のサインもらわなくちゃ。

薫

あー、ずるいずるい。私が先だからねえ！

栄子

ちょっとやだ、薫、放してよ。

小倉佑介

あのお、お取り込み中すみませんが…。

薫/栄子

はあ。何、小倉君？

佑介

あのお、サイン帳に何か書いてもらえますか？

薫

えー、あたし？

佑介

いえ、あのお…。

栄子

私？ いいわよ、小倉君。

佑介

じゃなくて、あのお、岸本さん、お願いできますか？

結実

あら、私？

薫/栄子

(口々に)もう！ 何よそれ？ 岸本違い？

薫ナレーション

「ブブー」の勘違いでしたね、全く。さて、気を取り直して、(セキ払い)えー、私、岸本薫。中学 3 年生。今一緒にガヤガヤしていたのは、クラスメートの栄子と、同じ名字の岸本結実。結実とはいとこ同士なの。父の弟の子でね。同じクラスだから、初めのころはよく間違えられたな。今でもそう。でも、もうすぐ卒業。うれしいような寂しいような…。やっぱり寂しいな。

<<タイトル>>

栄子

ねえ、俊哉。サインどれくらい集まった？

菅原俊哉

えーとね。(ペラペラめくる音)うちのクラスは大体書いてもらったよ。

薫

わあ、もうそんなに？

結実

ほかのクラスの人のも集めたの？

俊哉

うん、3 年だけじゃなくて、先生たちのもね。もうきっと会えないから。

栄子

へえー、偉いなあ。あ、そうか、俊哉は高校がずっと遠いからね。私も、きっとみんなと世界が違っちゃうだろうな。

薫

どうして、栄子？

結実

栄子は、美容師の専門学校へ行くのよね？

薫 えー、ほんと、栄子？ そんなの知らなかった。そんなの知らなかった。どうして？ 高校決まっていたじゃない。

栄子 だって、けられちゃったんだもん。“服装や髪型が校風に合いません”とか何とかでさ。いいんだよ。私、勉強なんか、始めっから好きじゃないしさ。どうせ私みたいなのは、先輩にケチつけられるし、先見えてんじゃん。高校行ったらろくなことないからさ。だからね、もういいかなって…。(FO)

ナレーション なんか割り切れない思いがした。あと 1 か月もしたら入学だという時に。外見は少し派手だけど、中身はシャイないい子なのに。“高校ってそんなとこなのかな”と思うと、少し心配になってきた。

(効果音) (ドアの開く音)

薫 ただいま。

父 やあ薫、お帰り。

薫 あれ、パパ、どうしたの？ こんなに早く帰ってきちゃって。

父 「帰ってきちゃって」はないだろう。いやな、雄三叔父さんが相談があるって言うんでな、今日は早いんだ。

薫 へえ、そうなんだ。

ナレーション 雄三叔父さんというのは、父の弟、つまり結実のお父さんってわけ。お医者でとってもスマートなの。

(効果音) (玄関のチャイム)

薫 あ、来た。はい！

父 やあ、いらっしやい。

雄三 こんばんは、兄さん。

結実 こんばんは、伯父さん。

薫 いらっしやい。あれ、結実も一緒？

父 ま、上がれよ。今ちょっとママさんは買い物に出てるんで、お茶ぐらいしか出せないが、さ。

薫 じゃ、私がコーヒー入れてあげるわね。おいしいんだから。

雄三 ありがとう、薫ちゃん。実はね、兄さん。以前にも話したことなんだけど…。(FO)

ナレーション 私はなぜかはしゃいでいた。どうしてだろ。雄三叔父さんがステキだからかな。(クスリと笑う) 結実と雄三叔父さんは、二人暮らし。結実のお母さんは 3 年前にがんで亡くなったの。そのころからだったか、叔父さんも結実も近くの教会に行き始めたみたい。そのお陰で、大分二人とも明るさを取り戻した感じ。

父 なんだって、バングラディッシュ？

薫 なあにパパ、そんな大声出して。パンがどうしたのよ。はい、お待たせしました。“香る(薫)コーヒー”です。

父 パンじゃないよ。雄三たちがバングラディッシュに行くと言うんだ。それもキリスト教のために。

薫 え？ バングラディッシュって、あの、食糧難とか、すごく貧しい国でしょ？

結実 うん、そう。そういう国だから、助けを必要としてるのよね？

父 何もお前たちが行くことはあるまい。しかもこの時期に。

雄三 それは兄さん、前にアメリカへ準備に行く時にも、話したじゃないか。今がその時なんだ

よ。

薫 叔父さん一人で行くの？

雄三 いや、結実と二人だよ。

薫 えー！ いつ？

結実 3月30日の夜の便で、アメリカへたつの。

薫 えー！ 3月？ じゃ高校は？ テニスは？

雄三 結実が考えに考えた末、出した結論なんだ。“高校では勉強できないことを勉強する”と言ってね。テニスは、今まで薫ちゃんとダブルス組んでやって、少しは腕を上げて大会にも出られたし、そのコンビで高校にも推薦入学させてもらえたんだが、これで薫ちゃん独りになっちゃうけどねえ。(FO)

ナレーション そう。私と結実とは 3年間コンビを組んで、テニスに打ち込んできた。そのコンビが見込まれて、テニスでは割と名門の清里高校に推薦入学が決まっていたのだ。叔父さんたちの突然の話に、私は、何から考えていいのか分からなかった。寂しさと、疑問と、不安と…。次の日、学校で――。

(効果音) (終業のチャイム)

俊哉 おい薫、職員室で大沢先生が呼んでるよ。

薫 え？ あ、そう、サンキュー。

薫モノローグ なんだろうな、私に用なんて。

(効果音) (ノック音)

薫 失礼します。

(効果音) (ドアを閉める音)

薫 え？ はい、はい。でも…。はい、はい。分かりました。そうします。(受話器を置く)

(効果音) (ドアを開ける音)

俊哉 なんだった、薫？

薫 なんだ、俊哉いたの？ 別に。

俊哉 ほんと？ でも、なんか変だよ、薫。

薫 なんでもないってば！(駆け出す)

俊哉 おい、ちょっと！ 薫、薫！

薫モノローグ (息を切らしながら、泣きそうな声で)言えるはずない、俊哉になんか。希望の高校に受かったンルンしてる俊哉なんかに。結実とのコンビが解消なら、私の入学も少し考えさせてくれて言われたなんて、そんなこと、恥ずかしくて言えないわよ！ ああ、清里高校へ行ってプレーするのが私と結実との夢だったのに。学校もひどい。結実の抜けた私じゃ必要ないって言うの?! 結実だって、結実だってひどいよ。自分だけ外国行って、好きに暮らすほうを勝手に決めちゃうなんて、裏切りだよ。私はどうなっちゃうのよ！(多重エコー)

結実 薫、ちょっといい？

薫 あ、結実。私も、私も話がある。ねえ結実、どうして行くのよ。やめなよ、そんなとこ行くの。面白くないじゃない。初めに決めたとおり、高校行って一緒にプレーしようよ、ね？

結実 薫、ごめんね。相談もしないで約束破っちゃって。でもね、どうしても今行かなくちゃならなくなったの。だから、薫は清里高校行って、テニスして、今度はシングルの選手になってよ。ね？

薫 そんなの無理だよ。ダブルスで、二人一緒にできなきゃダメなんだよ。私一人じゃ価値がないんだって。さっき、高校のほうからそう言ってきたんだもん。

結実 そんなあ。ひどい。

薫 だからね、結実、外国なんかに行かないで。一緒にいてよ、お願い。

結実 薫…。父さんと私がクリスチャンだってこと、知ってるでしょ？ 今度の決断は、父さんが、これまでの仕事を捨ててまでやりたいって言うほどの、大切な働きだからなの。お給料だっあるかどうか分からない。食べ物だって、日本とは比べ物にならないくらい貧しいでしょうね。

薫 ほんと？ そこまで貧しいとこなの？

結実 うん。だから、だからこそ父さんはすべてを投げ出して、物質的にはとても貧しいその国の人たちに、クリスチャンだけが与えられるもの、神様からの豊かな愛を知らせたい、注ぎたいって思ったんだと思うの。

薫 豊かな愛？ 神様の愛？

結実 うん。神様はどんなに汚い心、そう、自分中心の思いだけの、イヤな私たちをそっくりそのまま包んで、愛してくださるお方なの。裁いたり、とがめたりしないで「分かっているよ」って赦して、手を差し伸べてくださる愛の方よ。

薫(モノローグ) “自分中心の思い”。なんだか、私の心の中を見透かされてるみたい。そうだ、私、結実を引きとめたのは確かに自分の都合のためだった。結実のためみたいなこと言って、自分が困るからだったくせに…。

結実 父さんね、聖書に出てくる人が言ったみたいに、こんなこと言うのよ。「俺が自分の走るべき道のりを走り尽くして、イエス様から受けた神の恵みの福音をあかしする任務を、果たし終えることができるなら、俺の命は少しも惜しいとは思わない。」笑顔で、でもマジに言うのね。その言葉を聞いたら私、涙出ちゃって。(間)だから私、高校生することも、テニスすることも捨てられた。それ以上のことが、きっと海の向こうで待っていると信じられるから。

ナレーション 結実の感動が私にも伝わってきたのが不思議だった。神様とかイエス様とか、よく分からないけど、叔父さんや結実の生き方って言うのかな、それを見せつけられて、キリスト教の本物を感じた気がした。

(音楽) (BGM「揚げば尊し」)

ナレーション 卒業式も無事終わって、明日は私の高校受験の合格発表の日。いろいろ迷ったけど、やっぱり清里高校は辞退して、二次募集で青春高校を受験したの。これでさっぱりして結実たちを送ってあげられる。それぞれの道、私たちは歩いていくんだね。

(効果音) (空港のガヤ、出発アナウンス、ジェット機の爆音 FO)

<後編>

薫 ディア結実、お元気ですか？ 最後の春休み、どうしてる？ もうディズニーランド行った？ 本場は違っだろうなあ。あれ？ 結実のいるシカゴって、ロサンゼルスと離れてるんだっけ？ ナハ、私、もう少し社会科勉強しなくちゃ。もち、社会だけじゃないけど、見えてないもんね、いろんなこと。高校行ったら、勉強の世界に旅立つぞーなんちゃって。あれ、そう言えば、結実にはもう春休みも何もないんだねえ。

<<タイトル>>

音楽 (女声ヴォーカル BGM)

ナレーション 私、岸本薫。この 4 月から青春高校 1 年生。親友岸本結実とはいとこ同士。3 日前に、結のお父さん、雄三叔父さんの固い決意で、バングラディッシュでの医療活動の準備のためにアメリカへ旅立った。雄三叔父さんは、医者という社会的にも経済的にも高い地位を捨てて、そしてまた結実も、物質的に豊かな日本での将来の明るい高校生活を捨てての犠牲的な旅立ちをしたのだった。それはただ、キリスト教の神様の、深く豊かな愛を伝えるためだった。私にはまだ彼らの思いのすべてや、神様のことは理解し切れてないけど、その真剣さ、真実さには胸を打たれた。薫でもねえ結実。やっぱり、空港で流した結実と叔父さんの涙には参ったよ。“絶対泣かない”って前の晩決めたのに、ダメだった。「行ってらっしゃい」って笑って言うつもりだったのにね。へへ。今度の土曜の午後にはね、俊哉と栄子と一緒にライブ行くの。すごいでしょ。ちょっぴりスリルだな、なんか大人になったみたいで。中 3 から高校への春休みって、ちょっと中途半端だね、不安定で。

(音楽) (ブリッジ)

俊哉 それがさ、15 クラスだよ。すごく多くて、同級生の名前だって卒業までに覚えられるかどうか自信ねえよ。

薫 へえー。マンモス校なんだ。それで皆、頭もいいんでしょ？ 考えらんないね。全く。栄子のほうは？

栄子 え、うちの美容専門学校？ そうだな、年はさ、中卒も高卒も混ざってるから、いろんな刺激があるみたい。

薫 へえー、年上がわんさというんだ。カッコいい人いた？

栄子 いるにはいるね。まだ皆、どっか突っ張ってる感じ。俊哉のほうはどう？ その後彼女とはうまく行ってる？ 学校違っちゃったけど、連絡してるの？

俊哉 うん、してるよ。ほとんど毎日電話で話してる。

栄子 すっごーい。

俊哉 だって、家も遠くなったから、なかなか会えないじゃん。薫の学校は？

薫 いーない、いない。みんなダサくて。中学のあの小倉君みたいなのがゴロゴロしてるよ。あーあ、中学のほうがみんなよかったみたい。

俊哉 ほんと。それに先生の態度も違うんだよ。教えてあげるって感じでさあ…(FO)

ナレーション みんなの話は尽きなかった。別々の学校へ行った 3 人だけど、一緒にいるとホッとする。ま だ毎日が探り合いの新しい学校生活で、少し緊張しているせいかな。3 人で相談して、毎週土曜日に会うことにした。やっぱり中学の友達が一番いいな。

(音楽)(喫茶店のBGM)

栄子 お一つず。お待たせ。

俊哉 栄子、遅いぞ。うわ、スゴ！ 化粧してるの？

栄子 少しね。みんなしてるよ、美容の子たちは。あら、そういう俊哉だって、モロ茶髪にしちゃって。

俊哉 あ、うん。だって髪の毛の決まりなんかないし、靴下はもちろん、制服も自由でいいからね。中学とは全然違うのよ。自由でいいよ。

薫 へえー、そうなんだ。私の学校はあまり中学と変わらないな。あれほどはうるさくないけどね。

栄子 実はね、エヘ。彼ができそうなの。1つ年上なんだけど。

俊哉　　へえー、やるじゃん。もう見つけたの。でも1つ年上？

栄子　　そう。高校中退して美容に来たんだってさ。それがさ、ジャニーズみたいなの。イケメンでさあ…。(FO)

ナレーション　　なんとなく少しずつ、栄子や俊哉が変わってきた。遠い存在に見えてくるのは気のせいかな。ちょっと寂しい気がした。そのうち、だんだんとみんなで会える時がなくなってきた。土曜の午後はデートだったり、高校の友達とどこかへ行ったり、とそれぞれのスケジュールが合わなくなってきたのだ。

俊哉(フィルター音)　　あ、薫？　ごめん、明日用ができちゃって会えなくなっちゃった。じゃまたね、バイバイ。

ナレーション　　一人取り残された私は、無性に結実会いたくなった。

薫　　ディア結実。お元気ですか？　私は少し元気が出ません。新しい生活になじむことができないの。頼りにしていた俊哉と栄子も自分のことで一杯みたい。なんか、孤独になっちゃった。中学のころはよかったなあ、楽しくて。

父　　おい、薫。手紙だぞ。結実ちゃんからだよ。

薫　　わあ、ほんと？　　どれどれ。ほんと、エアメールだ。

薫　　ディア薫。お手紙ありがとう日は、自分の手で書いてみたかったので、手紙にします。(結実の声にダブる)

結実　　高校の制服姿の薫も見たいな。私は毎日、英語の勉強をしています。なかなか上達しないんだけど。ところで薫は、“寂しい”って、いつまでそこにうずくまっているつもりなの？　確かに、周りの人が変わっていくと取り残された気分になるのは分かるけど。

薫モノローグ　　あ、結実ったらキツ〜い。結実まで私を分かってくれないの？　前はあれほど同じものを見て、同じに感じて、同じものを追いかけてきたのに…。

結実　　ねえ、薫。人にはそれぞれの窓があって、同じ窓から一緒に眺めている時もあれば、違う窓を眺める時もある。そうして、その窓から一つの道を見つけて、それぞれの道を歩き出すんじゃないかしら。この時期は、私たちみんな、それぞれの春を体験してるのね。

薫モノローグ　　“それぞれの窓、それぞれの道、それぞれの春”かあ。私が立っている窓は、もう閉じなきゃいけないのかな。

結実　　私、思うんだけど、新しいものに立ち向かうのって勇気が要るのね。期待もあるけど、不安も一杯で。それで足が出なくて、今までのもの、古いものにしがみ付いたりして。でもそれ、やっぱり“逃げ”だと思うのね。実は、薫に話してなかったんだけど、父さん、半年前にがんの宣告をされたの。まだ初期の段階で手術したから、多分　50　パーセントは大丈夫って言ってたけど。まだがんが再発する恐れは　50　パーセントあるわけでしょ？　それも強い引き金になって、今回の医療活動に踏み切ったの。でも父さん、こう言うのよ。

雄三(エコー)　　俺の道、残された時間、いや、与えられている命をしっかりと握って、今、俺にしかできない仕事を確実にやり遂げたい。もしがんが再発しても、俺はあそこの土になる。

結実　　強いでしょ、父さん？　昔はそうじゃなかったのよ。母さんがやっぱりがんで死んだ時、苦しんでた時、もう病院の看護婦さんに当たり散らして、すごかったんだて。泣いてる時もあったって。そんな父さんが、イエス様信じて変わったの。私が一番ビックリしたんじゃないかな。それで、“これは本物だ”って思って、私も教会へ行くようになったの。ねえ、薫。信じるかってすごいね。しり込みしたくなることでも、進んでいけちゃうのよ。なぜかって言うと、それは神様が、一番いい道、最善の道へ導いてくださる方だって信じてるから。薫も一歩踏み出して。神様から勇気を頂いて。祈ってるわ。

薫(モノローグ) 結実、祈ってくれるの、弱虫な私のために？
ナレーション なんだか結実がとってもお姉さんに感じた。でも、久しぶりに心が落ち着いたのは不思議。
薫 パパ、ねえパパ。
父 なんだ、大きな声で？
薫 雄三叔父さんががんの手術したって知ってた？
父 え？ あ、ああ、まあな。
薫 ずるい、私に隠して！
父 いや、あまり大げさにしてもなあ。
薫 叔父さん、向こうで再発しても、帰ってこないって。向こうの国の土になるって。普通の人じゃできないことだね。
父 あ、ほんとだな。雄三は強くなったよ、結実ちゃんと二人になってから。
薫 あら、違うわよ、それ。叔父さんが信じてる神様の力だよ。人間はただでそんなに強くなれないよ。
父 お、薫。いいこと言うなあ。
薫 まあね。(二人、笑い)
(効果音) (電話の呼び出し音)
薫 あ、私が出る。(受話器を取る)はい、岸本です。あ、俊哉？ どうしたの？
俊哉(フィルター音) 薫、どうしよう、聞いてくれよ。彼女がさ、同じ学校で彼氏ができたらしいんだよ。俺もう、どうしよう。
薫 えー、ほんと？
(効果音) (玄関のチャイムの音)
薫 あ、ちょっと待ってね。(玄関に行く)は一い。
(効果音) (ドアの開く音)
薫 あら、栄子。どうしたの？
栄子 薫、どうしよう。付き合い始めた彼がさ、体ばかり求めるの。私、妊娠しちゃうんじゃないかと思ってエ。
薫 はあ？ ちょっと待っててね。(電話に戻る)もしもし俊哉？ ほかの男子に取られてもいいような子だったら捨てちゃいなよ！ (玄関に戻る)いい、栄子？ 生まれるかもしれない
赤 ちゃんに迷惑だから、そんなやつとは早く別れちゃいな！
俊哉(フィルター音) えー、そりゃないよ、つめてえなあ。
栄子 (玄関から) そんなあ、薫ウ！
ナレーション それぞれの窓、それぞれの道、それぞれの春…。いろんなことあるけど、私はやっぱり胸を張ってこう言おう『そして、…春』
音楽 (エンドミュージック)

<完>